

平城宮跡・藤原宮跡の整備

庶務部・平城宮跡発掘調査部・飛鳥藤原宮跡発掘調査部

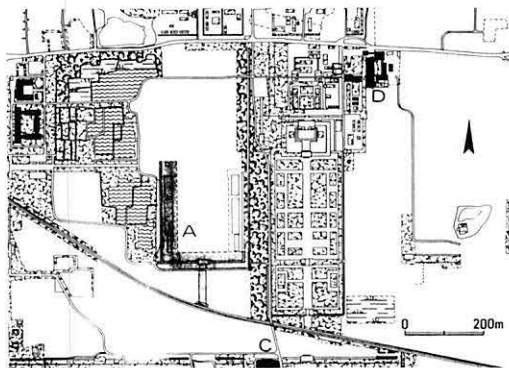
1 平城宮跡の整備

1986年に実施した平城宮跡の整備は、第一次朝堂院地域の整備、宮内省北面築地および門の復原整備、二条大路整備、東大溝復原整備、平城宮跡資料館改修、平城宮説明用および道標用陶板の製造等を行った。

第一次朝堂院地域の整備 ここで第一次朝堂院地域としている地域は、南は朱雀門跡から北は一条通りに至る南北800m、東西220mのいわゆる広義の第一次朝堂院地域である。この地域は近年、その東半部の発掘調査が進展し、遺構の概要が明らかにされてきたが、本格的整備は未着手のまま残されていた。平城宮整備基本構想では朱雀門および北部の推定第一次大極殿地区は建物復原ゾーン、その中間の狭義の第一次朝堂院地域は基壇復原を中心とする遺構表示ゾーンとして位置づけられている。しかし、建物復原・基壇復原いずれも相当な経費と年月を要する事業であり、一朝一夕には実現できない。一方、平城宮の中心部をいつまでも草ぼうぼうのまま放置しておけないという側面もあり、当面の暫定的整備として盛土・張芝により建物配置を表示し、第一次朝堂院地域の構造・広がり等を感じ得る形に整備することとした。

暫定的整備の骨子は以下の通りである（第一次朝堂院地域整備基本計画図）。

- ① 第一次朝堂院地域の遺構変遷は大きく第Ⅰ期（奈良時代前半）と第Ⅱ期（同後半）に分かれるが（『平城宮発掘調査報告 XI』），遺構表示は第Ⅱ期の建物配置を主とし、第Ⅰ期の建物も簡易な表現で表示する。
- ② 具体的には、建物範囲より10m程幅広く、平均厚20cm前後の地形造成盛土を行った上に、朱雀門および朝堂建物基壇は1.2m、朝堂院南門および大極殿院南門基壇は80cm、朝堂院等を囲む築地、築地回廊基壇は30～50cm高の盛土を行い、その上面に基壇規模を凝灰岩縁石で表示する。また、朝堂の南北に建つ仮設的な掘立柱建物は、花崗岩縁石を回して平面的に表示する。縁石内部は樹脂舗装仕上げとするが、門と朝堂の建物基壇上面は丹塗りのイメージに近い赤色系、付属の掘立柱建物・築地基壇上面は土壁を思わせる土色の舗装とする。
- ③ 第Ⅰ期の大極殿院回廊・南門・東西楼基壇は20cm高に盛土し、表面は張芝とする。
- ④ 朱雀門内北側の広場（SH 1850）および朱雀門から朝堂院南門に至る宮内道路（SF 1950）を碎石敷で復原し、側溝は割石縁石とする。
- ⑤ その他の盛土法面、建物周囲は原則として張芝とする。

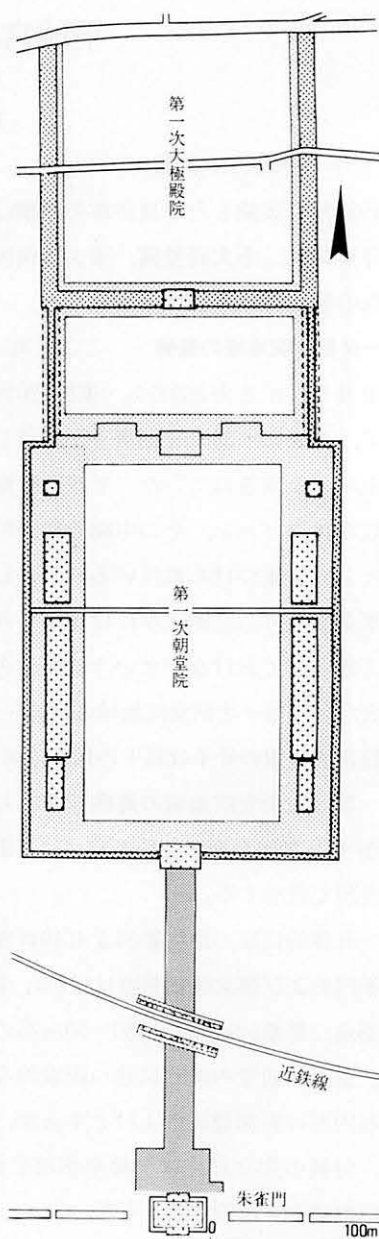


平城宮整備位置図

以上のような基本方針に基づき、すでに1985年度に一部地形造成盛土を行っているが、今年度は朝堂院地区のうち西第一・二堂，付随する掘立柱建物2棟，西・南辺築地，朝堂院南門，および宮内道路（SF 1950）の近鉄線以北の部分について復原・表示を行った。今回整備した朝堂院の西半部は未発掘地ではあるが，朝堂院の中軸線と東半部の発掘成果から，これらの東半部の遺構を中軸線をもとに西へ折り返し，位置を求め，建物表示した。ただし，こうして復原した西辺築地位置に現在の用水路が南北に流れており，この用水路の位置を変更するには当該地の発掘調査を行う必要があること，新たな用水路によって平城宮の遺構が壊される虞があること，また用水路の管理上暗渠化が困難であることなどの理由により，用水路は現位置のまま嵩上げし，グレーチング蓋を架け，そこに平行して築地表示を行うこととした。築地表示は基壇幅4.4mを凝灰岩緑石で表示するが，本来の位置に復原すると，用水路と凝灰岩緑石が大部分の地域で重なり，凝灰岩緑石を通すことができない。このため，やむなく西辺築地の表示位置を西へ1m平行移動させた。また予算の関係上，築地と朝堂院南門，西第一・二堂基壇の表面舗装は今年度は行わず，次年度送りとした。

宮内省北面築地および門の復原整備 第二次内裏東方官衙の復原整備の一環で，すでに復原建設を行った南殿第一殿（1974年）第二殿（1985年）を取囲む障壁の一部である。第70次の発掘調査によって，築地は基底幅1.5m（5尺）で，寄柱を用いない形式であること，門は築地心位置に2.7m（9尺）の間隔をおいて相対する2本の掘立柱による棟門であることなどが確かめられている。

今回は門と門を中心として東西にそれぞれ9.6mの築地を復原した。築地は伝統的な手搦き工法とし，1回分の仕上げ厚さ8cmを基準に，それを5回繰返す毎に側板を移動させ，総高2.4mに築上げた。軒まわりの仕様は推定の域を出ないが，比較的単純な桁直乗り方式とし，これに角垂木を繫に配った。門の屋根を築地と同高に通す案，門の幅一段切上げる案の2案が考えられるが，この門が内裏へ通じる通路に開く主要な出入口となるところから後者を採用した。



第一次朝堂院地域整備基本計画図

施工にあたっては、一旦遺構面まで排土し、砂養生の上、土壌処理剤を混入したマサ土を転圧して基盤を形成した。門部分は基盤中にコンクリートスラブを打ち、ステンレス製のアンカープレートを立ち上げ柱底を固定した上、三和土叩き分（10cm）だけ柱を埋め込み掘立柱の形式を保持した。石製唐居敷は平城宮東南隅溝中から出土したものに倣い、また軸摺金具も出土品を参考に復原製作した。なお、今回の施工区以外の築地位置には鉄製の柵を巡らせ、一官衙ブロックの広さを表現するとともに、2棟の復原建物の管理の便をはかった（図B）。

二条大路の整備 1985年度に平城宮跡南辺部の未買収地であった北新大池および小池の国有化が完了した。一方南辺部の整備については、この2地区を残すだけとなっていたことから、大池については埋立てを行い、敷地境界に和泉砂岩雑割石積擁壁（高3.1m、延長73m）を設けた。埋立てに際し池底部に堆積したヘドロ処理のため、土壌改良（四成分土壌改良剤48kg/m³使用）を行った。なお1988年に開催される「なら・シルクロード博覧会」のサブ会場を平城宮跡に計画し、そのメインアプローチを朱雀大路跡としていることから、北新大池・小池の埋立てはシルクロード博協会の協力を得て行った（図C）。

その他 覆屋西側で実施された第172次発掘調査で確認された東大溝（SD 2700）を、玉石積護岸溝（幅2.4m、深0.6m）とし延長68.6mについて復原を行った。

また、近年設置要望の強かった平城宮跡の説明板や道標について、平城宮展示委員会において検討を重ね、大極殿跡や朝堂院跡等12ヶ所に説明板を、資料館正面前等13ヶ所に道標を設置することとした。使用材料としては、着色が自由で変色しないこと、マジックペン等による落書等に強いこと、傷を付けにくいことなどから陶板を使用することとした。今年度は第一次大極殿前の広場と朝堂院についてその鳥瞰図（180×90×2cm）と説明文（60×90×2cm）の説明板各1枚と道標13基分の陶板の製造を行った。なおいずれも設置は次年度とした。

	第一次朝堂院	宮内省築地・門	二条大路	東大溝	資料館改修	陶板製造
規模	24,600m ²	22.4m	3,750m ²	1,020m ²	1,316m ²	一式
工費	130,000千円	29,000千円	23,000千円	6,700千円	62,630千円	7,900千円

2 藤原宮跡の整備

1986年度には、2種類計5基の案内板を設置した。一つは大極殿基壇西南方のもので、従来通り台檜材の説明板を屋形で覆う。藤原宮と大極殿の概要説明文を教科書体で機械彫りし、現況地図に遺構配置図を重ねてステンレス板に腐蝕させた三色の図を添えた（図中a）。もう一つは1983年度に仮整備した見学者用広場4ヶ所に設置したもので、陶板製（105×70×2cm）。これを凝灰岩の台座（手前での高さ30cm、傾斜30度）に寄せ、広場の北部中央、擬木製のベンチの前に配した。説明文には藤原宮・京の概要を記し、横に飛鳥・藤原地域全体



藤原宮整備位置図

を示す地図と現在地を表示した藤原宮域の地形図を加えた(図中b, c, d, e)。なお工事費は台檜製説明板1基2,600千円、陶板製説明板4基5,920千円であった。

また、既整備地内にヤマザクラ20本、イロハモミジ7本、コウヤマキ8本、サザンカ19本等中高木59本、アセビ等灌木443株の補植を行い、工事費は2,100千円であった。

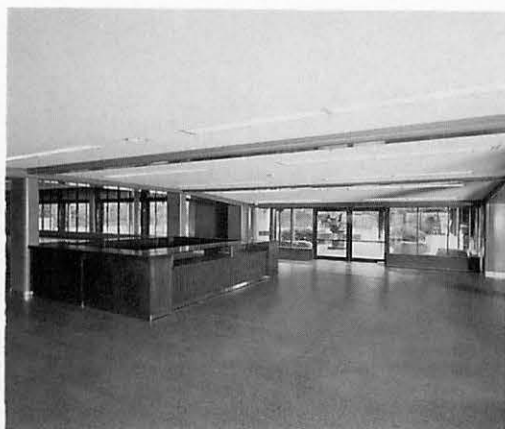
3 平城宮跡資料館の改修

この建物は1970年、入江三宅設計事務所の基本設計、建設省近畿地方建設局の実施設計により、鉄骨造平家建(1,943㎡)の研究棟および展示施設として建設された。その後、1980年の研究所移転統合に伴い、1981年に写場・講堂・便所を部分的に改修した。今回の改修は、展示室関係を中心とする1,253㎡(上記の改修部を除く)の内部全面改修であり、文部省大阪工事事務所に実施設計を依頼し、監理は当研究所と共同で行い、1987年2月竣工した。改修は、これまで576㎡と狭小であった展示室を844㎡に拡大すること、また小規模な特別展の行えるコーナーや、見学者用の休憩室を確保するなど、将来の利用変化に対応しうる快適な施設として充実させることを目的とした。

平面プランは、玄関ホール(受付案内等)、展示室(2ブロック)、管理事務室、展示準備室、資料倉庫及び便所等により構成し、中庭には63㎡の休憩コーナーを増築した。

工事概要は外部窓部に展示資料等の大型可動パネル、大型固定展示ケース(2基)及び将来ビデオコーナー部を独立させる為の可動間仕切壁レール、天井にはスポット照明用のライティングレール(展示替に順応)を取り付けた。また、外部窓(北・東面)に鋼製パネル扉、シャッターなどの防犯対策を施した。展示準備室は、展示資料等の製作、改修、展示模様替等を行う為の室であり、資料倉庫は展示物等の保管、整理に使用する。管理事務室は、館内の空調、その他維持管理業務をここで総括的に行える機能を備えている。

(細見啓三・山本忠尚・高瀬要一・渡辺康史・井元正澄)



玄関ホール



中庭に増築した休憩コーナー